２０２２年４月３日（大斎節第５主日、C 年）牧師メッセージ
「すべてのものは主の賜物」

（ルカによる福音書 20:9-19）

司祭ヨセフ太田信三

東京聖テモテ教会の教会報は「葡萄園」です。その名に表されているように、教会は神さまのぶどう園です。もしも、わたしたちが教会を自分たちのものにしようとするなら、そこからわたしたちは追い出されてしまうでしょう。イエス様は「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」と言われました。教会が神さまのものであることを忘れず、農夫として、キリストの枝としての与えられた務めを果たすことができるなら、豊かな実りが与えられます。

農夫たちは、ぶどう園の主人が送った僕たちを手荒く扱い、送り返してしまいます。忍耐強い主人は、自分の息子なら、と愛する子を農園に送りますが、農夫たちはこの息子をなんと殺してしまいます。理由は単純です。農園を自分たちのものにしたかったからです。人間はこんなにも悲惨で恐ろしいことをするのかと思わされますが、わたしたちの現実を見つめるなら、たとえばウクライナで起こっていること、そしてイスラエルの歴史を振り返るまでもなく、「自分のものとしたい」ために起こされる悲惨な出来事が繰り返されていることに気付かされるはずです。今日の福音は決して現実離れしたものではないのです。

人間は所有によって安心を得ようとします。そこに「自分のものとしたい」思いが生じます。しかし、他者を顧みず、神から離れたところで得た所有によって保証される幸いなどありません。それどころか、自らの幸いや安心だけを求めるなら、人は離れていき、愛に飢え、孤独の苦しみに至ることでしょう。わたしたちは聖餐式のたびに、「すべてのものは主の賜物、わたしたちは主から受けて、主に献げたのです。」と言って、献げものをします。すべてのものは主のものであり、わたしたちが手にするものはすべて主からの賜物です。それを持ち寄り、「主の平和」という言葉とともに分かち合い、神に献げることができるなら、より豊かな実りがもたらされます。しかし、それを勘違いして、自分のものだとしてしまうなら、農夫たちがそうされるように、ぶどう園から追い出されてしまうでしょう。

主イエスは「自分のものとしたい」人間の頑なな心を砕くために、十字架に上られ、隅の親石となってくださいました。最も尊い方が十字架につけられたお姿は、わたしたちの驕り高ぶる心を打ち砕きます。隅の親石は、わたしたちの驕り高ぶりをも砕く石でもあるのです。その十字架をいつも見つめ、心砕かれ、すべてのものは主の賜物であることを忘れずに歩んでまいりましょう。